

編集後記

■少しずつ、春の息吹が感じられるようになってきました。皆様には、ご活躍のことと拝察いたします。あの歴史的な大震災から1年が経ち、それからの1年に何が変わったのか、今後どう生きるべきかを改めて考えたりしています。18巻1号をお届けいたします。2012年は、9月に札幌での学術大会を予定している都合上、第1号（今号）、第2号（次号）ともに若干発刊が早くとなっております。

■今年2012年はAschoffによるヒトの隔離実験50周年、Moore, ZuckerらによるSCN破壊実験40周年、程らによる*mPer1*のクローニング、Takahashiらによる*Clock*のクローニング15周年などに当たるようです。他にもこんな発見の区切りの年だ、という情報がありましたら（たくさんあると思いますが）、お寄せ下さい。次号で追加したいと思います。

■今号には、例年のように学術奨励賞受賞者の先生方による受賞論文をお寄せいただきました。2011年度の学術奨励賞は、多士済々の3名（安藤仁先生、栗山健一先生、中畑泰和先生）が選ばれ、大変熱くてユニークなエッセイが盛りだくさんです。是非お楽しみください。総説も盛りだくさんです。増淵悟先生には、哺乳類の時計遺伝子の研究について、ご自身の体験談をふんだんに盛り込んだ、これまたユニークで楽しい総説をお寄せいただきました。郡宏先生からは、大事だとはわかっているものの、今一つとつきにくかったりしがちな、リズム研究における数理的な解析の勘所を、とても丁寧に解説していただきました。数理解析に親しんでいる方にも、改めて面白く、奥深い解説になっていると思いますので、ぜひご一読ください。郡先生の総説は次号にも続きます。そして、本間研一先生からは、時間生物学の歴史（世界編）についての貴重な総説を御寄稿頂きました。まさに世界をまたにかけた歴史の証人であり、かつ第一線の研究者としての本間先生ならではの視点からみた時間生物学の経緯を、人間ドラマのあやも含めて活写してくださっています。

■今号の表紙は、生命（とくに植物）をテーマに積極的に活躍している現代美術家で写真家の山本涉さんに、キルリアン（放電）写真をご提供いただきました。一見、なにかの発光・蛍光レポーターを使った生物学写真のようですが、植物の葉をフィルムに載せ、導電体で挟みながら電場をかけ、感光させるというテクニックで撮影されています。その際、どのように挟むのか、その手加減でずいぶん違ったイメージが得られるそうです。ですから、植物自身の営みを科学的に捉えた写真というよりも、植物に対して自分がどのように介入しているのかを、物質的に捉えた写真であるという側面を意識して作品化しておられるそうです。最近行われた個展で観た実際の作品では、高品質のプリント（すべてアナログの、手焼きのモノクロ銀塩プリント）の見事な発色や、偶発的な傷までが非常に美しく、「生命を探究する芸術」の新たな表現を見ることが出来ました。このシリーズは、時間切片を切り取る写真ですが、山本さんの写真には、放電の劇的な瞬間が鮮烈に刻印されているにもかかわらず、「生命をどのように対象化するのか」ということも含めて詩情と物質性をゆったりと感じさせてくれるようで不思議な魅力があるように思います。ユニークな「作者のことば」も含めて、ご堪能頂ければと存じます。山本さんは、所属する美術大学の写真用暗室を、バイオアートの簡易実験室に組み替えるプロジェクトも手掛けていて、これからのご活躍がますます楽しみです。

時間生物学 Vol. 18, No. 1 (2012)

平成24年■月■日発行

発行：日本時間生物学会 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsc/index.html>)

(事務局) 〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院 生命農学研究科

応用分子生命科学専攻 海老原史樹文研究室内

Tel : 052-789-4066

(編集局) 〒162-8480 東京都新宿区若松町2-2

早稲田大学先端生命医科学研究センター

(TWIns) 1F 岩崎秀雄研究室内

Tel : 03-5369-7317 Email : hideo-iwasaki@waseda.jp

(印刷所) 名古屋大学消費生活協同組合 印刷・情報サービス部